

日本薬学会 第137年会

秋澤 宏行
Akizawa Hiromichi

2017年3月24～27日まで、日本薬学会第137年会が仙台市で開かれた。薬学会年会では、宿泊施設の確保に苦勞することが少なくないが、今回は、2016年に流行ったアニメ映画で主題歌を担当した人気急上昇中のバンドの仙台公演と日程が重なり、学会ホームページに宿泊施設の確保に関する注意が掲載される事態が生じた。

1. 東日本大震災後はいじめて東北地方(仙台)で開催

日本薬学会年会が前回仙台で開催されたのは2006年(第126年会)である。今大会までの間に東日本大震災があったことから、今回は「復興と発展、薬学の未来へ The Future of Pharmaceutical Sciences: Reconstruction and Evolution」というテーマで開催された。本欄の趣旨から外れるが、まず、東日本大震災に関して書かせていただく。

会場は仙台国際センターと東北大学川内地区であった。これらの会場は、地下鉄東西線の国際センター駅と川内駅のすぐそばにあり、非常にアクセスがよかった。この東西線の東端の駅は荒井駅という。震災のとき、現在の荒井駅のある場所の近くまで津波が押し寄せたそうである(当時、東西線は工事中)。その荒井駅の駅舎内には、“せんだい3.11メモリアル交流館”が設置されている。これは、東日本大震災を知り学ぶための場としてつくられたものである。筆者は学会の合間にそこを訪ねた。津波の被害を受けた地区の震災前後の航空写真、震災直後の写真、復興の記録のために定点撮影した写真などが展示されていた。展示場には、実際にこの近くで被災され



写真1 荒浜慈聖観音と東日本大震災慰霊之塔

た女性がいて、震災のこと、展示内容について説明をしてくださった。この女性や館長から、海岸の近くに慰霊塔があることを教えていただき、タクシーでそこに向かうことにした。タクシーの運転手に行き先を告げると、「こちらに来られるのは初めてですか?」と聞かれ、「そうです」と答えると、車中、震災について色々な話をしてくださった。屋上に避難した人達の命を救ってくれた荒浜小学校の校舎、津波で歪んだガードレールなど。慰霊塔に到着し、掲載用の写真を撮った後、同じタクシーで荒井駅に戻ったが、降りるときに運転手が言った言葉が強く印象に残っている。「震災のことを知らない人がいたら、その人にここで見たことなどを話してください。風化させてしまうことが一番いけないことだと思うので」

2. 放射線関連の一般口頭発表, ポスター発表

一般口頭発表13会場, ポスター発表2会場, そ

の他の特別講演などに13会場が設けられ、一般発表と講演が同時並行で行われた。一般口頭発表とポスター発表は、化学系薬学、物理系薬学、生物系薬学、医療薬学、環境衛生系薬学、薬学教育の6分野に分けて行われた。

放射線、放射性物質を扱う演題は、基本的に物理系薬学に分類される。筆者が調べた範囲では、今回はすべて物理系薬学とされており、口頭は14演題、ポスターは28演題であった。口頭14演題のうち12演題は放射性医薬品、2演題は放射線生物学、ポスター28演題のうち18演題は放射性医薬品、5演題は放射線生物学、3演題が放射能測定で、2演題が環境であった。

環境に分類された2演題は、東日本大震災関連のものであった。1つは保健医療科学院、神奈川衛研、埼玉衛研、日本分析センター、帝京平成大健康メディカル、松本大院健康科学のグループによる発表で、福島県内6都市の成人と幼児の食事からの放射性物質の摂取量を調査したもの、もう1つは、神戸薬大、東北大院理、福島県医大、東北医薬大、独協医大のグループからの発表で、アイソトープ実験施設の排気モニタのデータを利用して大気中ラドン濃度を推定し、その濃度変動カーブの変曲点が東北地方太平洋沖地震(Mw9.0)前に存在するかについて検討したものであった。

3. ノーベル賞受賞記念特別講演

2016年にノーベル賞医学・生理学賞を受賞された大隅良典先生による受賞講演が行われた。昨年は大村智先生による講演があったので、2年連続の企画となる。

講演内容はもちろんオートファジーに関するものであったが、「他人が顧みないことをしよう」など、特に若手研究者に向けてのメッセージが述べられていた。そのご講演の中で、「合成は何か正の印象があり、皆が取り組むが、代謝(分解)は負のイメージがあり、取り組む人があまりいない」という旨のお話があった。筆者は放射性医薬品に関する研究をしているが、標的にいかに高く集めるかという観点よりは、非標的にいかに集積しないようにするかという観点で主に研究を行ってきた。あまり人がやろうとしない研究だと思う。大隅先生の言葉も



写真2 受賞された佐治先生(右)

左は新会頭の奥直人氏(静岡県立大学大学院薬学研究院)

励みにして、今後も取り組んでいきたいと思った次第である。

それにしても、大きなことを成し遂げる方というのは、確固たる信念、哲学をお持ちなのだなど改めて感じさせられた。

4. 京都大学の佐治英郎教授が日本薬学会賞受賞

初日の代議員総会の後に、学会賞の授賞式が行われた。筆者の恩師であり、アイソトープ協会でも理事、医学薬学部会副部長を務められている京都大学大学院薬学研究科(当時)の佐治英郎教授が日本薬学会賞を受賞された。受賞講演のタイトルは「生体分子イメージングに関する研究」であった。

生きたままの状態で見えないものを見えるようにすることを目指して、そして、分子生物学と生体画像工学を結ぶ生体分子イメージング学の確立を目指して取り組んでこられた研究の成果についてのご講演であった。核医学分子イメージング、光分子イメージングを目的としてこれまでに開発された数々の分子プローブについて、設計概念を含めた解説があった。その数の膨大なことを改めて認識し、驚かされた。佐治先生に少しでも近づけるように努力しなければならないと気を引き締め直した次第である。

過去を振り返り、よりよい未来を目指す。そのようなことを強く感じた日本薬学会年会であった。

(昭和薬科大学 薬品物理化学研究室)